



中條毅編著

『現代の雇用問題』

(総合労働研究所 A5版)
(二五五頁 二、五〇〇円)

本書は、現在雇用問題上の焦点となっている中高年、婦人、障害者の雇用問題を取扱っている。

本書の構成は次のとおりである。第一部高齢化と雇用問題では、政府及び自治体の中高年雇用対策を分析し、企業別組合の雇用問題への積極的取組みを提言する。「中高年雇用対策の現状と課題」(石田光男)、中高年者の地域労働市場と内部労働市場を分析する「中高年労働と労働市場」(今城義隆)、個別企業での定年延年事例を分析する「定

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

年延長への労使の取組み」(西岡孝男) 日本職業訓練制度の特色を分析したうえで高齢者の能力開発政策を提言する「職業訓練と中高年層の職務能力」(中條毅)の四論文から構成されている。第二部婦人労働と雇用では、婦人が従事する割合の高い家内労働の実態を分析する「家内労働の現状と問題点」(山本正治郎)、パートタイム労働者の実態を分析し、労働時間によって二分化していることを示した「パートタイム雇用の実態と分析」(筒井清子)、パートタイム労働者の賃金・雇用管理・労働組合の組織化方針を分析する「最近のパートタイム雇用の問題点」(西口俊子)、女子の継続雇用を可能にする育児休業制度と再就職としてのパートタイム労働を分析し、その改革を提示する「再就職問題を中心にした女子労働」(玉井金五)、女性の労働市場への進出がすすんでいるアメリカでの性差別を経済学的アプローチで分析した「米国の女性労働と雇用問題」(馬場浩也)の五論文がおさめられている。第三部障害者と雇用問題では、障害者の職業リハビリテーション、障害者の定義と調査、障害者の雇用問

題、保護雇用と自営業の援助の諸問題をのべる「障害者の雇用問題」(行田忠雄)、障害者雇用の実態調査にもとずき、障害者雇用の前提条件の整備の必要性、使用者や国の雇用保障の義務づけの強化、障害者概念の拡大等を主張する「障害者雇用の実態と分析」(三塚武男)の二論文からなっている。

この十一論文からなる本書は、これまで日本の労働市場において、弱い立場にたたされてきた中高年、婦人、障害者の雇用保障を強化していくという共通の問題意識にたっている。どの論文も、雇用保障を妨げる要因を実態分析から抽出し、これをたす対策を提示するというオーソドックスな手法で書かれている。そして、日本での問題状況をあきらかにするため、アメリカ、西ドイツなどとの比較もおこなっている。実態分析の面で論文間に重複がみられるが、この問題に関心をもつ者にとっては有益な本となるであろう。

香川孝三(大学文学部助教)

ニコス・カザンザキス著／見玉操訳

『キリスト最後のころみ』

(恒文社 二、四六版)
(四九二頁 二、三〇〇円)

これは感動的な作品である。読後の感覚からすると、ドストエフスキーの大作を読み終えた時のそれに似ている。頭をぐわんとなぐられて、しばらく呆然としている気分、といえよよかろうか？

長年にわたり同志社中学教諭として英語を教えてこられた見玉操先生が訳出、出版された『キリスト最後のころみ』は、カザンザキスの邦訳としては、同志社の卒業生である上智大学の秋山健教授訳の『その男ゾルバ』について二冊目だという。

キリストの生涯については、むろん四つの福音書からその概略を知ることができる。しかし、イエスの生涯を、その悩み、悲しみ、恐れ、喜び、怒り、涙、汗、血をふくめて同時代的に実感するためには、この小説（この書は伝記ではなくて、あくまで小説である）の提示するようなお膳立て、ないしは肉付けが必要である。カザンザキスのイエスは本当の意味で人間であ

る。そして人間の苦悩の極限を味わうイエスは、人間である故に迷い、恐れ、たじろぐ。彼の受難の終局は、十字架にかかる時に到来する。悪魔はイエスにその生涯をすべて夢であり、無意味であったと思わせ、ベタニアのマリアとマルタの二人を妻として幸福な家庭におさまる夢を送り込む。最後の瞬間にイエスはそれを断固として拒否した。彼は真の意味で神の子であった。

弟子たちのうちでいちばん戦闘的で、ニヒルで、現代的な人物はユダである。ユダに較べるとこの小説のペテロは臆病でおろかで、はなはだ見劣りがする。いな、ユダに敢えて裏切るようにしむけたのは、イエスの深慮であったことをこの書は示す。教会が認めそうもない大胆な想定である。

最後の四章が「最後のころみ」の部分である。ここに登場するサウル（パウロ）はすさまじい男で、イエスにむかってこう叫ぶ。「もし世界が救われるためなら……お前が十字架にかけられる事が必要なのだ。絶対に必要なのだ。お前が好むと好まざるにかかわらずおれはお前を十字架にかけてやる」（四七頁）。このようにパウロはイ

エスを脅迫する。この小説は時間と空間を平気で超えて、苦悩する人間イエスに強烈な光をあててみせる。無限に聖書に忠実でありつつ、大胆に聖書から逸脱する。カザンザキスのイエスに一度捉えられた人は、そのイメージから逃げ出すことはできなくなるであろう。

北垣宗治（大学文学部教授）
入江節次郎著

『イギリス資本輸出史研究』

(新評論 A5版)
(四八八頁 七、〇〇〇円)

本書は、入江教授の多年にわたる研究の成果で、イギリス産業革命の本格的展開期である一八二〇年代における資本輸出についての史的究明をめざした労作で、本文だけで三八八ページ、付録や精細な索引などを含めると四八八ページにおよぶ大冊である。

内容を概観すると、まず「序説」において、資本輸出史研究の意義として、資本の循環運動の解明、世界経済史研究への寄与、段階的特質究明との関連の三点をあげられ、I～VI章で資本輸出の背景をなす国際

収支や商品貿易の構造、綿工業を中心とする生産力構造、会社設立ブームなどが考察される。つづいてVII～XI章ではヨーロッパ大陸の諸政府への投資とラテン・アメリカの諸政府および民間部門への投資の実態が丹念にあとづけられている。この部分は本書の庄巻ともいえるもので、教授がロンドンで発掘された原資料をも駆使されながらきわめて克明かつ精緻に分析され、現在のわが国におけるこの分野の研究の到達水準を示す労作であるといえよう。さいごのXII～XIV章は、資本輸出の経済的意義や投資者層についての多面的な究明にあてられている。

資本主義経済体制の国民性と世界性との関連をめぐる問題は、経済学のあり方の根幹にかかわる重要な課題であるが、本書は資本主義の世界的連関性についての認識を深め強化することをめざし、基軸として資本輸出を位置づけられ、その発生史を究明されたものである。これまで資本輸出については、一九世紀末葉以降の資本主義のいわゆる帝国主義段階とのかかわりで論じられることが多かったのであるが、本書で

は、イギリスにおいては産業資本の展開期である一八二〇年代すでにその原型が本格的に形成されたものと把握され、今後の資本輸出論研究にとって新しい知見を切り拓いた成果であるといえよう。残された問題点としては、資本輸出の経済的意義をやや強調し過ぎていた面がみられること、イギリス資本輸出についての連続性と段階的差異性との関連、短期金融市場と資本市場との結節点とされるマーチャント・バンカーの役割の評価などの問題があり、教授のさらなる研究の進展が期待されるのである。

藤村幸雄（大学経済学部教授）

R・F・ショウ著／深田尚彦訳

フィンガーペインティング

（黎明書房 二〇〇〇年）
（二六七頁 二、〇〇〇円）

幼少の頃、水滴や薄水でくもった窓ガラスに、指で絵や文字をかいいたり、あるいはまた戸外で、泥んこ遊びに夢中になった経験をもつ読者は多いだろう。

本書（Ruth Faison Shaw: *Finger Painting: A perfect medium for self-expression*）

on, 1934, Little, Brown & Co., Boston)

を貫いている発想と実践は、実は、この指絵（フィンガーペインティング）と泥いじりという子どもの行動に基づいて生まれた。著者のショウ女史は、一九二二年、ローマ在住の英米児童のための教育の任をうけて、アメリカからイタリアへ渡った。彼女のローマでの活躍ぶりは、本書の随所でうかがうことができるが、とくに児童の絵画教育には熱心であった。彼女の念願は、クレヨンや鉛筆ではなく、子どもがもっと自由に充実感と豊かさをもって、自己の創造的・空想的内面を表現できるような描出技法を編みだすことにあった。しかし、なかなか名案が浮かばず考えあぐんでいたとき、はからずも、彼女は、「指につけたヨードチンキをその部屋のドアにうれしそうに塗っている」「子どもを学校の洗面所で見つけ、「これが私の頭の中に一連の考えを引きおこした」とショウ女史は述べている。一九三三年、ついに彼女は無害でしかも「子どもがその手にじかにつけて塗られたくれる材料」フィンガーペイントを作ることと成功した。フィンガーペイントという

よりは、「濡れた画紙の上に絵の具をあげるために、知らず知らずのうちに全身が協力している」というほうが正確であろう。

彼女はこの絵の具を使用して描かれたフィッガーペインティングには、子どもの感情や欲求が生きて表現され、また描く過程が、子どもの悩みのカタルシスになることを、多くの子どもの事例と絵をあげながら本書の中で実証している。本書が刊行されて以来、欧米では各分野で大きな反響をよんだが、とくにナポリは、このフィッガーペインティングをパーソナリティの投影法として高く評価し、臨床心理学における診断と治療の分野で発展させた。私事にわたるが、私がノースキャロライナ大学大学院に留学時代、大学構内にある記念病院で、精神病者の治療のためにフィッガーペインティングを彼らに熱心に指導していた晩年のシヨウ女史の姿を想い出す。このたび、女史の古典的名著が出版五十年目に、描画心理学の専門家である同志社女子大学教授深田尚彦氏によって立派に訳出されたことはまことに意義深いことである。

浜 治世（大学文学部教授）

今中寛司編

『日本の近代化と維新』

（ぺりかん社 B6版）
（三三八頁 二、二〇〇円）

日本の近代化と明治維新という問題は今中教授もいわれるように実に古くして新しい学問的課題である。しかしそれゆえにまた、日本近代史の研究を志す者にとって、それは避けて通ることのできないいわば原点ともいべきテーマである。本書はこのような重要なテーマを「日本の近世封建社会の特質の史的解明とその矛盾の克服としての日本の近代化の性格究明」をおこなうことを目的として書かれた。執筆陣は編者の他にいずれも新進気鋭の日本思想史を専攻する五人の今中門下生で構成されている。

内容は序章「維新変革思想」Ⅰ「日本のナシヨナリズム」Ⅱ「風土論的民族国家論」Ⅲ「志士的王権思想」Ⅳ「日本の近代市民思想」終章「日本の近代化」から成っている。序章と終章は、本書でとりあげられている主題や人物研究の視角の提示としてⅠからⅣの個別論文の解説の役割をはたしている。

いる。さて、各篇でとりあげられている人物であるがⅠでは後期水戸学の学者たち―藤田幽谷・東湖父子と会沢正志斎―、Ⅱは佐久間象山、横井小楠、島津斉彬、Ⅲは橋本左内、吉田松陰がそしてⅣでは山路愛山と北村透谷がそれぞれ分析の対象に選ばれている。このような主題の構成は、編者の維新の変革は、「水戸学的ナシヨナリズムのイズムと松代や肥後や薩摩にみられる功利主義的な『強国』」観念、それに超藩的な志士的王権思想に立脚した新しい政権構想によって実現されたとする考え方に由来している。

そして、やや唐突な印象をうけるが、維新後の叙述は、幕末の松陰から一挙に明治二、三〇年代にとんで山路愛山と北村透谷が「日本の近代市民思想」という主題の分析対象として選択されている。しかし、それは、愛山についていえば、かれが維新以後に発展をみた市民社会のさまざまな側面―今中教授はそれを民主主義・自由主義・個人主義の問題として指摘する―に関わりをもった思想家であることと透谷の場合、その『内部生命論』にみられる個我的確立

Ⅱ「自立した個人の主体的な倫理の形成」
の志向性が顕著にみられるからである。

個別論文はいずれも問題意識の明確な力作揃いで随分読みごたえのあるモノグラフィである。唯、本書のように、日本の近代化とナショナリズムという視角から対象に接近するいわば意欲的な問題史的思想史の書物に対しては、当然、提出されたいくつかの命題について感想を記すのが書評子の義務というべきものであろう。第一点は個別研究の理論的前提となる範疇論について。たとえば、幕末の水戸学を日本のナショナリズム一般に解消して理解するのははたしてどうであろうか。つまり、それは、維新の変革を達成した後の明治政府の推進する富国強兵や脱亜論、それに竹越三叉のいわゆる「自由帝国主義」流のナショナリズム——时期的には明治二〇年代に成熟した——や明治国家の文明開化や近代化を推進した明六社系の思想家たちのイデオロギーとは別個のいわば前期的ナショナリズム（近代国民国家形成の前段階としての幕末期に特有の多元的政治勢力の一元化＝尊皇論の一君万民論を目指す政治運動）といった範

疇の中で検討される必要があるのではなからうか。また、五ヶ条の御誓文から政体書（太政官制）に盛り込まれた維新直後の政治制度や不平士族の行動にみられるアンビバレンツ——士族反乱と自由民権運動——、明六社や民権思想等、明治二〇年代に天皇制国家が制度として確立される直前の歴史過程を同様の視角から分析されることを将来に期待して筆をおきたい。

西田 毅（大学法学部教授）

